九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

滑稽洒落一寸見た夢物語

吉町，義雄

https://doi.org/10.15017/2332884

出版情報：文學研究. 52, pp.47-62, 1955-06-20. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

滑稽酒落 一寸見た夢物語

吉町義雄

原書は袋綴中本二冊の板下本で表紙は薄鼠色地に濃鼠縦縞で数箇の波紋に梅花が押出されてある。題簽はないが上巻は白紙一丁の表左端に「滑稽酒落 一寸見た夢物語　上」と墨書あり、序は四方を線で囲つて二丁、本文は框も丁付もない九丁の次が白紙一丁で終り、その裏中央へ二行に「芳蘭屈　為氏」とある墨書は舊蔵者名らしい。中巻は本文だけで三十一丁分。各巻共表裏各九行宛で一行は廿数字詰。

著者の案聞坊暮成については不明であるが、序文の慶応三年二月と云う年月は今日より殆ど八十年前となる。内容は日峯祭の佐賀市内光景を方言を踊らせて描いた滑稽本であるが、上巻は幕末世相を写して当時両端を持した佐賀藩の立場を示し、中巻は方言が横溢して郷土方言文学資料となる。上中巻共版にはならなかつたと思はれるし、下巻も恐らく書かれなかつたのであらう。

原書は天理図書館の中村幸彦氏が京都の書肆から入手されたものを（当時旧制佐賀高校の）杉浦正一郎教授に譲られ、それを杉浦氏が佐賀県中央公民館機関紙『明（あかり）』昭和二十四年一月通第巻五号（第二巻第一号）及同年六月第九号（第二巻第五号）へ解説発表された。只是は中巻十二丁裏半迄で止んだまゝなのを自分が未発表残余部と共に全部を纏めて本誌へ覆刻するのである。残余後半部において自分には読めない字があるので杉浦氏の教示を仰いだ。茲に同教授に謝意を表する。

本覆刻では自分は中巻だけにある（後から附加されたと思はれる墨色筆勢の）句読点は敢て一切省いた代り、（杉浦覆刻には省かれた）振仮名は全部示す事にした。又各丁表裏区別と共に各行切目をも」で解らせたのは吉町の老婆心である。出来るだけ原字を忠実に覆刻しようと努力したし、所々の原書頭註は「　」もて又方言語釈は【　】もて区別して杉浦覆刻が何れも（　）もて済されたのを完備した。方言語釈の方は吉町私案により或は不必要なものにも書添へておいた。？は蟲喰又は切断で不明字。

序

彦嶺（ひこさん）八万八谷の細流も一つに溝澮（こうくわい）してハ」いくその淵瀬（ふちせ）となり

て名にし負ふ千」とせ川の大流となり有田泉山の白磐の遺ニ」大なるも陶師の手に砕かれては小き夫彼の」箸と造りて三國一の名物となる倩世情万」般の業を鑑るに此意に彷彿として細大倶に」其用る処の人の材に依て愛憎ハあるそ〔以下ウ〕かし予此稗史を編綴するも丁度そのことく大な」るを削り小なる物を集て滑稽酒落の」種本となし稚児女子の目をよろこばせんと錐」毛を揮ふ敢口に糊せんが為にもあらず復」嘗三國一の名誉を得んとにもあらず唯黒」牟田の欠徳利と拙巧の劣なるを以て目」本一の大笑を求んことを要とし侍りき抑」狂言俚語の補綴は軽薄浮虚にして述著威〔以下オ〕重になき世の人口の責を防禦に術計なく」餘り好しからざる藝といへども頗る鄭声の淫」風を勧とは稍か差へる謂にしてまた勸善」懲悪の一端ともなり且は此御祭の結構に」章句なからんも又本意なきわざならずや」と頗りに人の需に固辞がたくて」止事を得ず筆を緑柳窓下に」採ると云爾

〔以下ウ〕于時慶應三ひのと卯弥生下浣

案間坊

暮成 花押

〔一丁〕一寸見夕夢物語巻上

今は昔〳〵の故語ならでタツタ今時の頃とかや」異国の船とか申て何艘も渡来り神代から動か」ぬ我日の本の湊に開港とか交易とか申事か」初りましてより以来世間の拍子が頓と大間違と」なりまして諸人の心も心ならず夫さへあるに土」地に産する所の五穀は元より衣類道具飯杓子」脚布箱に至る迄手のかゝり目の及ふ処何品に」よらす手にはを付テ高く買取らるゝ故忽ち諸〔以下ウ〕色が高値となりまして富士ハ三国一の高ひ山と聞」ましたけれと今では大体諸品が少しハ富士より高ふみへます」夫レじやに依て諸人朝夕茶かゆの煙りも立かねま」す処に夫レはまたしも最早其風俗までも見真」似伐り髪して焼竹とか申物をあてゝあつひ焼ど」も構はずとつほ【筒袖】大股引くつをはいて其儘洋異」の姿と成て歩行く人も御座るが是こそは昔の物し」りのいはれし被髪左衽の流弊終にハ世の風俗」も此に及びまして揚句にハ大形日本国中を戦は

〔二丁〕ずしてすつぱりとして水引に長蛇付て異国」へ遣はすと申腹行で御座らふと存じます

とつぽうに鉄炮十方もないわざは
是闇雲ナ人の目の玉

これハいかさま横文字の横おしで億病神」が誘ふていろ〳〵御尤付て其先を手引する白癡」者があるもので御座らふが案じて見なされとつ」ぽに大股引となりましてハわしが様ナもナア虱が噛み」のみがくつた処が手が届かず肝心の処ハ雪いんにいたら〔以下ウ〕股引がつつぱってかゞみにくふ御座りましよ見な」され長上下が切り袴と成り切り袴がまち高と化て」来ました処ハ果は股引となるの前狂言で山の芋」めが下から少しづゝ鰻と化る様ナ仕方で御座らふ今時の化方ハ大形どん鮫殿ともなられますで御座ら」ふ迚の事に鯨かとぢよふにならるゝが増であり」さふな事で御座る怖ろしい時は泥にねりこんで」居ますむの又第一横文字馴れぬ内はよめますま」い一寸考て見なされ南無妙法蓮華経と横文

字

〔三丁〕に書ましたら子供が清書をぬり 棒引てきやした」様ナ物が出来ェよまれますまい 掛軸仮装蹴鞠図 見」なされ 斯じや惣じて横文字ハ抹香たく様ニ読と申」事で御座りますが「カンセカマヲリシノマサキ」と書まし」たら順ニ成て横によんでよめまかひよつと二行目左」りより右によみますならば間違て見なされ 幾世鞠水引絵」斯ふて御座る様守濃美平松と読ましたら異人か寝言」をいふ様ナものでねつから分りますマイハ、、、、、、大笑ナ事」で御座る

〔ウ〕葛ら文字南京南瓜は糸瓜でも
瓜学文でならぬか木瓜に
初 窮理

夫は扨置此事が都へ聞けれバ時の 帝以の外逆」鱗まし〳〵て夫レ攘夷せよ鎖港せよと頻りに惣大将へ」勅 諚 あま下りたれバ 時の大将ハ第一億病と申持病」が起り其家来も同様衣食に満て腹ふくれ腰かぬ」けて立事が出来ぬと申て兎や角我手まへ のよき様な」る先見もありさふなる返事にて埒が明ざれバ 帝 歟」逆鱗強く迚もあんなあほうどもばかりでは我皇祖の

〔四丁〕代は皆異国の野菜畑となるであらふとの思召にてさ」らばよき思案社あれ北條が古例に任せ日本国中」の神々に申付て神風を吹せたらよかろふとあたゞに【俄に】」伊勢ヲ初め八幡熊野春日其外日本国中の神々」に奉幣使を下し幾度も夷狄退散の御祈誓在」てふとのつとの事爰限修し給ふにぞ八万四千の」神々仕方なしに風の神を呼んで根限り大風を吹」せて見られた処が唯人家ばかり崩れ船にハ些と」も答へず却て我国の迷惑となれば諸神も致し方ヵ〔以下ウ〕なく評議して見られた処が其筈昔シ蒙古将軍が来」た時ハ舟が小き木船其上作り方もあしくありたるゆへ」其節は見事に我々が働きにて吹ッ破り今の世ま」でも諸人が恐れ入て誉立れども此度の舟ハ是とは大」違ひ今の船は鉄にて山の如く作りたれば中々布」袋の分の風位にては彼者ども些とも構はずよき追」手が吹などと申て何ッの平気ェ居るゆへ仕かたはなし」此上ハ佛力をもかつて見たら又よき智恵もあるべしと」諸神申合さらば善光寺の黄金如来が今の世にハ

〔五丁〕相應の役目なるべしと各申合打つれて如来の処へ」参り相談ありければ早速如来も飲こみさらば我等」が妙知力にて彼舟共ニ一ト当あてゝ見るべしと申され」考へまする処が船が大さふで殊に鉄にて作りたれハ風」ぐらゐで破れぬハ尤千万の事で御座らふ夫デ我」等が工夫致します処の知恵ヲチョット聞テ下さ れ 先ッ」斯じや鉄は至て重くして沈ミ安き道理が御座れバ」 下より持ェ上ゲ腰を斯ふぐつとゆずつて見たらバよ」い気味に上よりおし付て来る処を其穴を引ッ〔以下ウ〕ぱづしてすかしたら大形船ハ 地獄の底まで沈むで」御座らふ是ハいかゞで御座らふかと申さるれば諸神も」手を打て是ハ中々妙計此手ハいかさま至極の事で」御座らふと申さるれバさらバ善事ハいそげじやとて」取あへず彼の善光寺崩れの大地震がおこり出せしハ」 迫が黄金佛の光りハ天地をひゞかせ貴も賤もおしな」へて有難奇特感涙を流す処に何がさて是も憎い」と思ふ夷賊の舟ハはちり程も怪我ハなく京都も江戸」も大崩れ大荒にて死腸の考も数限りもなくあり

〔六丁〕けれハ諸神諸佛も只あきれにあきれ果テ南無三」宝馬鹿如来どふした事で御座らふかと口々に申さ」れけれバさすがの如来もによつとしてもおられず顔を赤」めて申されけるハ是ハ私が少し誤た処が御座ル各も御」存の通り私ハ生れ出るを其儘唯我獨尊と申て天に」も地にも只タ獨身で御座るが恥しながら今まで妻子と」ても御座らぬ故アノ腰のゆすりかけんが頓と分らず夫で」ゆすりそこないが出来まして舟ニハ当らず何も知らぬ」江戸てハ吉原の深川のと申処京では祇園新地や大〔以下ウ〕坂でハ新町杯申処が重ニゆりくづしました今おもひま」すると此役目ハ伊勢太神宮の清水の観音様ハ女躰で」御座れバアノゆすり工合ハよく出来ましつろふものと」存しますものを残念ナ事で御座ッたか様ナ事と」ぞんじ増ナラ外にまた近道が御座ッたものをアノ無」常の風ハ私が得手で御座ッたもの夫をそろ〳〵吹せ」ましたら嘸ぞ人が怖ろしがつて手柄になりましよ」ふものを此上なき失念が出来ましたとの申訳にて

極楽の風ならなくに風の神わしは

〔七丁〕無常の風でよごした

扨又諸神諸佛も詮方なく此趣を以て早速奏」問なし給ひけれバ京都にも諸卿を早く召され吟」味ある処此上ハ世に成功ある人を撰んで攘夷の御」勅定あるべしと諸卿詮議の上札州帳家が相應の」家柄とて早速申付に成りました処が是も又大間違が」出来まして却て天下ニ弓を曳とか鉄炮を打とかの御」科がおこりまして夫から夷国の事ハさし置て先帳州」を御追討の御征討のと中々むつかしき事が起りまし〔以下ウ〕てどこもかも騒がしくなり哥右衛門が七化を見る様ナ人の」顔が青うなり赤うなりした処が何ンの鬼が出おるかと思」ひましたら屁も出ませぬ例の億病神が仲入やら口」利やら夫も尤是も道理じや兎角負ぬ先に和睦」〳〵といふや否や理屈も義理も法もなく沙汰」なしに御解兵とか申言甲斐ナキ御觸れといふに」世の中ホット蘇りたる心地を成て念佛講の中て卒」と屁放タ様にだまつて居る在様で御座る然るに」我内ハ諸国のかふあるに引替て重石が中々賢良

〔八丁〕く御座ッて千里の外の事も見ぬき百年の後の事ま」でも遠から知て居る程の親玉がおられましてあの様ナ」諸国色々騒きましたにも構はず悪い事が誘ふても」信義の二字に腰打懸ていつかな〳〵貧乏ゆるぎも」せず唯法のあるに任せて世間の煩ハしきをも厭ハず」十五年餘の混雑の中に安楽として終始一のことく」懸引が些とも違はず最早斯ふと申處をすつぱ」りぬけて出ましたといふ處ハ奇妙じや御座らぬか其」拍子に跡は一としきり大雨が降ました所が茶屋も陣〔以下ウ〕屋も崩れ芝居座本迷惑長州千万此様ナ早替り」懸引と申所ハ私が若イ頃御江戸で見た狂言に團十郎」が田舎娘と成ッて早替りして大盡様と成て高舞臺」にニョッと出た時キア見物人が同音にイヨウ親玉出」来マスと誉た様に誉たい處では御座らぬか然シ此」様なる懸引早替りハ中々千両役者でも出来ま」す處で御座らぬジャないかいノウ

小倉島肥後芋まじりにおりこんで

長府木綿の木地に負けり

〔九丁〕其有様に就て唯れ〳〵の国郡りもいろ〳〵様々の事が」

あつて騒ぎがやみませぬに此地ハ平気で町人百姓」の妨もなく朝夕の衣食に足つて其務を大事に懸」て豊に暮すといふも皆此重石がよき故の御蔭で御」座る然し是も全く其人の徳によつて氏神弓矢神」の専ら冥助にも寄るべしと申事で幸ィ当春ハ氏」神様御祭祀に当り給ふと申事で上ハ素り下々」に至るまで賑やかに何ィなりと己が好むわざ杯願次第」に緩せよとの厳命なれば久しく何事も無キ〔以下ウ〕末で御座れば旱魃に好雨が降た様ナ心持にて我先と」町々よりおどり狂言水茶屋はやし杯願ひましたに寄て遠き近キの差別なく見せ物や人形芝」居や我劣らじと煮うりくわし店うどんそば廣き」宮居も所せきまで取ひろげしは賑々しくぞ」見へにける是ぞ積善の餘慶行餘の鬱散と」申すべし

一寸見ダ夢物語上終

〔一丁〕一寸見ダ夢物語巻中

夫ハ扨置懸る御許しが出たる事なれば先壱番」に町々より我劣らじと御宮の馬場に次第唯」よい二階三階の茶屋を高く拵へ綾羅錦繡」ハ昔の事今ハ些と下直なる当時流行の唐木」綿ゴロフクの紅白いろ〳〵なる美を盡し善つく」して曠やかに飾り立夜は万燈の光り星と数」をくらべ幾千万と申限りなく其上に哥舞妓の場」所が三所囃ハ町なミ何も同し鼓太鼓笛琴三味〔以下ウ〕線にて男女打交り拍子面白く囃子音ハ天外遙」に聞へて天人様ィも天の羽衣を翻がへして舞出給」ふかと思はれ神霊の御感應もいかばかり成べしと」群参の男女も皆感涙を流して信心肝に銘じけ」れバ弥生の空の永キ日も暮るゝを惜ミけるとなん抑」此御祠の勲功ハ今爰に更て贅せずとも皆様ンの」もとより御承知前にて又おこがましく申ハ恐れ」みもすくなからず故唯其御祭祀の壮厳に人の興」ある事のみ見もし聞もしたる所を筆に写しぬ

赤猿

〔二丁〕

一日の光り末久しかるしるしぞと

二峯のかすみも引ける有様

三扨も其当日となれバ御社にハ恒例の御飾り物きら」びやかに又由緒ある人々あるひハ在々所々より奉納し」奉る処の産物は駸しく山を成し歴々の人ハ花」やかなる装束を折目高に繕ひ威儀正し拝殿」廊下に列座あれば祢宜神主ハ齊戒沐浴してけふ」を曠と出立衣冠を整へ恭々しく三拝九拝して〔以下ウ〕天下泰平御國家安全六根清浄ふとのつとの御」祓声清く鈴人の袂をひるがへして霊奠に神楽」を奏する笛の音も空清み渡り神さびぬ有様は」かしこくもありかたく老若男女拝殿に歩を運び」賽の声鈴鰐口の緒もちぎるゝばかり往来絶」間ハなかりけり

歓入

物事が高間か原となりぬれば
茶屋の圍も高くこそあれ

扨其茶屋を見上れバ唐人まぬるもあり異國人

〔三丁〕作るもあり又官女など作るもありて皆々爰を曠と」囃し立る有様ハ喜遣城の楽もこれにハ及ぶまし」と思はれ又其形装

の奇麗さハ言語の及ぶ処ニあらず」上下貴賤老若僧俗の差別なく其日〳〵と群集」する事幾千万といふ事を知らず人の上の人なり」けり中にも北山邊の者と見へて男女僧俗相交り息」せき来懸り中にも六十七八斗の親父と六十斗りの鼻」のひしげし老母（親父ハ松葉色の敵付縮入老母ハ花嫁のL時きた懸模様のきものに書過の色と成「びんろんじ」の弊をメ七八才斗りの孫とおぼしき乙松が手を引て〔以下ウ〕其外骨蔵雁八杯いふ若者打連立て若「ヲ、イ骨」蔵早ふこんかアこりやアどふかアぢつぱなア【立派な】事ヲヲ捻右」衛門祖父もおくろうぼさん【おばあさん】も乙どん【孫乙松】が手をきつふひつ」つかまへて連レうつちよしなはんようにして【失はぬやうにして】此から早ふ見んかア」こりやアどふきやアぢつぱな事ヲヲ、アノ又提灯のよんに」よふさア【数多いことよ】骨「まこてへようヲ【誠にねえ】ちやうちんの百も十こもさがつ」て青ヲかきれの赤アかきれのテ、どこもかんも引キちらか」してぢつぱに白もん【女】どんが仕出アておるばん【着飾つて居るよ】コリアドウカア」ぢつぱさアおどまア生れてからはじけ【め？】てこぎやん事

〔四丁〕タア見たアおくろうぼさんナア目が目ちやで遠見へガせんテ、い」ひなさるサアこゝの石のあんどんの上に這ア上ツて見ナされゆ」ふ【良く】見ゆるばん其替り落たテ、鼻打世話ア御座らんばん鼻ア」うつぶしやげて額が先キイ出と居るもん乙どんもそびキア【引摺る】」バ、「ハア是ハ〳〵まこてへヨヲ、ありやアなんちうもんカアあかねの」きれの何ンのてゝそびきちらかして化た事ノウ〔原文頭註　化たとハ珍らしといふ事〕雁八「ナル程こつ」からかふして見た処ラアどふもいはれん祖父の前髪ぢつぱなア事」ばんアノ又人のうふさア捻右衛門ヂィうぼさん達も前もこぎ」アン事の有ッた事のあるかん捻「ヲ、ある共〳〵おどんが二十斗の頃にも一度〔以下ウ〕あつた時キアまあだこぎアナ事じやなかつた十八」町から仕立狂言の飾りのテ、有たばんでもがこぎアン家の」上へ家を三だんも引重ねてちやうちんのコギアンちいた事タア」なかつたコリヤ御浄土極楽世界のごと【如く】あるばんノウ歓入様」淫楽し和尚「成程〳〵御方かたのいひなさる通愚僧も京江戸を初メ」諸國偏歴いたした事が御座るが遂にこんなことハ見ナンダ」赤猿様ンおまへもおんなじことじやロウナア（一人三反田し流の社人赤「実」に左様で御座る全躰此くらゐな事タア考て見た処」が日本始て二度じやろふと存しまする日本記杯しら

〔五丁〕べて見ました処が國常立の尊から其後天神七代地神」五代でも御座らぬソイカラ御案内のごと天照太神がうまれ」出サシツタ時女子だちら【だてら】帝の位に昇り其舎弟そさのふ」の尊がうまれ付淫楽好で難題アばかり懸るケニ【故に】太神」宮が腹キヤアテ【腹掻いて→立腹して】此様ナ阿房では揚句にハ世上仕廻方【財産を蕩盡す】さる」より外ハなし第一世間の人に対して申訳が立ぬといふ」て天岩戸に引ッこもらせタ時キヤア忽ち世の中が常闇ノ」夜と成て仕廻ふた処が日本国中諸万人が難儀いふ斗り」御座らぬどふ評議が御座ッても盲斗りで先の見ゆる人〔以下ウ〕が御座らぬ夫て田打ても畑打ても目くら打ニてハいかぬ故」あんどんちやうちん半時も御座らでハ何事するにも済」ぬゆへアタシに蠟油らが上ッて今の値くらゐになりまし」た又早ふ〳〵ハ焚まつも竹木きりつくして是も高」直となりました夫で私くらゐな貧乏者今日〳〵

の火」がたかれず暗き處に寝て斗りおります故火なしに出来」るものハ只子ばかり禅寺の和尚さんさへ孫まで持たれ」た位でどの家でも五人十人子の出来ぬ家ハ御座らぬ六」十七十に成ル嗚どんまで産まへェならんもナア御座らぬケヘニ

〔六丁〕あたゞに人間が多ク成まして米高直夫ニ付て諸品も」高間ケ原で諸人が困り果て只嬉しがるものハ猫と鼠と」若ひ者浮遊ナ遊び好の野良子息イッおこして仕事」に行といふても未ダ夜が明ぬといふて起きず夫で神々がかふ」在てハそこに行にも道がとんとなくなり法も知れずァ、かふいふ目くら世界でハ自然と日本ハ滅亡して仕廻ふ」でアラフト夫から段々八百萬づ神達を神集に集メ神」はかりにはかり給ふて天岩戸の前にて踊り狂言は」やしなどをして見たらばヒョット岩戸が明ク事も御〔以上ウ〕座らふか と夫から岩戸のまへに舞臺を懸ケ踊り狂言」はやし軽わざ見せ 物煮うりそば切り餅まんぢう何に」至るまて在た所が神ばかりが八百万づと御座レバ嘘八百万」人又其事を聞傳へて老も若きも貴も賤きも参」詣しました其時も丁度此様ナ事で二階三階ニハ琴」三味線笛皷太皷にて囃し立た時ハ中々の賑やいで」御座たと日本紀に見へ増が其後の事でハ 此御祭りより」外ニハこぎやアン【此様な】事ハ日本に御座るマイ今様ナ時ハ先一番ニ」御上を祝しませずしてハ済ませぬ故一句やらかしま

〔七丁〕しよか和「いか様左様で御座る
いくら見ても山邊赤猿
打や皷メッゆるめつ琴なくて
おさまる御代そ 本調子なる

淫楽寺歓入

仰き見る茶屋の囃子に浮されて
あしも空なる宮の賑はひ

骨「モウいつまで爰から見ても本方【本当】ニャア分らぬばんまちつと」先へヒヤッていこふか皆々「ソレよかろふと段々先へ茶屋近く〔以下ウ〕成る儘に大勢よつたる事なればアッチへどや〳〵コッチへゆ」ら〳〵おしあいへし合する内に此北山の人もずら〳〵おし」こまれ捻「コリヤアどふするどやおしが初ッたアうぼう乙」どんが手をはなすなソリヤ又おす〳〵〳〵コリヤどふする」雁八煙草処じやナカ【ない】骨蔵赤猿どんエジイ【えらい】気のきかざる」人ぞ雁「サア斯ふ帯に手を遣ッてつれウッチョシなはん」様にしつかりとかざり付がよかろふおくろうばうさんハ祖父」様ンの腰にユウ【よく】かがり付ておいナさい乙とんハ已が後からかざり」付ておれ捻「アタ、、、、、、コリヤどふする親のゆづつた時よ〔八丁〕りやア疝気でおれがかせぎ出してふとめて置たア金」玉ア猫の様ナ爪で掴ミさくアイタ〳〵〳〵この手ハだいキャア」ム、此うぼうか夫ケン爪が長カッタなし【何して↑何故】おれが大切ナア金玉」マアつかミさくか黙「ゴメンナサイわしやまた腰の所へかざり」付ておれといふたアケヘニおまいさんの昼さげておつた大握り」めしと思ふて間違たわたしが爪も本嫁子へ成ッた時取」たばかりモウ四十年も取らぬものを惣して垢が一ぱい中」ャア たまつておるケヘニメッタアニアア爪かたア入らん筈で御座」るといふ内も歩となしに茶屋の前におされ行ク続ひ〔以下ウ〕て跡から来る人ハ書生と見へて四人連れ内医者二人」（山井遊仙豆腐野不愛し何事勇太郎おつ

と承知之助「サア〳〵〳〵ヲセ〳〵〳〵アノ茶屋のま」へエ出タコンナラウ見物勝手がよかろふ然し美婦人の多ひ方ニ」行が一番じや勇公先陣せんか勇「ヲツト承知之助じや」サア〳〵〳〵おせ〳〵〳〵といふて行ク処に茶屋ハ皆細からげに」て木のとがりが先へ出た所に遊仙が羽織引懸ツてサツト」引さく遊「コリヤ大変仕廻ふた「皆々どふした遊「どふした」所じやなか【ない】むいな【無理な】事ダアしたぞ羽おりを引さいた此御「祭り故嗚にねだつて壱両弐歩がとゴロフクで拵へた

〔九丁〕羽織ダツタ一夜で引シヤアて三ンみやアがともなかよふに成ツ」た内にかへると第一親父がイトダ【大層】ふとか【大きい】目ン玉を頂戴仕る」因果ナ不孝をしたといふてしかむるかほ勇「ハ、、、、貴」公はマチツタア見識があると思の外コノ位ナ事を悔む其」位でハ天下の英雄とハ成りえマイ既に孔夫子が論語に」謂れたじやナイカ衣ニ弊温袍ニ興下衣ニ狐貉ニ者上立而不レ恥者夫」遊仙かと流石孔子ハ先見が強イ千年前から貴君が今」日の事を言て置かれたといふ内にも四方の茶屋〳〵に眼を」配り「ヤア時に勇公承公此邊からカウ東西を見下した〔以下ウ〕處ハ実に奇妙〳〵マア斯ふいふものじや万燈遙ニ星」光を掠て錦繡斜に五彩の雲霧かと疑はれ妓女の」紅粉を粧ふて百尺の高楼に唱歌を調ぶるは更に人」間中の態とハ思はれず彼の玄宗が揚貴妃と高臺に」登て三千の宮女が管絃を奏し穆王が崑崙山に」巡狩して王母が宮に入て音楽をなした時の風情かと」思はれどふもいへぬ見事〳〵遊「成程貴公の御説の」ことくかふ見た処の景色ハ筆紙にハいはれぬ先年僕上」方遊学の時に見た江都よし原の夜桜京都でハ四

〔十丁〕條川原の夕涼ミもいかな〳〵及ばぬ程あるがアノ西の端に」ちやうちんに呉の字を書た茶屋に一人ハ年間三人の女」が出て囃す有様ハどふもいま〳〵ならした手わざとハ見」へぬ品合ア察する所上方ものと見へて下地から知て知」りぬいだ手風じやのふ拍子とイ、手品行儀どふも」いはれぬ各いかゝ思召す今度の囃子にては甲科〔原文頭註　甲科ハ第一といふこと〕第一で」アラヲノウ其上美婦じや「是ハ貴公の確論十目の見る」所間違ひあるまいドヲカ彼美婦と一夜寝テ見たいノウ」孤「此儀拙者も同意仕らふが承「ム、願ハ成ニ軽羅一着ニ〔以下ウ〕細腰ニ願ハ成ニ明鏡一分ニ鏡面ニ」といふ気デあらふ遊「フン成」レ雲為レ雨楚襄王ガ神女と陽臺の夢にでも我輩でハ出来」ぬ事ダヤロヲ然し此女ハ手取りと見ゆる野暮ハいけま」いと酒落まはる後ろにハ武雄有田を東の者と見へ」て男女打連れ三太郎「ヤアお腰どんかん膳「ヲ、三チン」どんかんなちいりいロウチン三「ノウいのちのおんちよふハどこ」さみヤアいたチウどやおしんでつれんバうつちよしナハン」様にせさアならんビヤア

此辺の言葉命を惜のちといふ又家内といふ事ヲいのちと」云ヒ親父といふ事をおんちよふといふ也惣じて此辺の言葉ハふ也」又ビヤアといふはソウカヲといふこと

膳「ぬしがおんちよふハ小便つんまつて来るチウテうせたピヤア」イヤ最ふソツチヤカラ見へて来たチウピヤア三「ヲ、イいのちのおん」長どんかんアノ高アか所ケへ上ツてもん〔原文頭註　上もんとハ白物といふ事女の事也〕どんが手おふバ」上ケたり下ケたりアイするチウ又ダアこつチ

ヤ東の方ニ肩ア」にヒッかたげたもナアなんじやロウかん腮「ナンチウありやア」五器としてしりつないで【原文頭註　皷の胴ハ　として図解あり次に　わんの尻と尻合タナリ凡て飯わんの事をこつきいといふ城下在郷ニハ五器と云】又其上への方に大きナカ【大きな】嘉」瀬の焼餅ンじやリイロウ又いで餅じやリイロウ赤アカ繩チウてヒッ」からげ付てウッ敲きして時々舌バ【をば】出アてキャアナメ〳〵する〔以下ウ〕もナア何ンチウもんビヤア　親「ヲ、アイカンにし達ア知ラぬ筈おどんが若カアか」頃ア世の中ア賑やふて狂言チウもんした事が在ばんソラそけへ今アイ」おるタア狂言チウもんばんおどんがア若ッた時ア千本桜チウ」狂言が仕立に成タばん又其時キヤアおどんが男ぶりがよか【良い】」チウテ義経公の御うで懸ケか御前チウもねへ成た時」キヤア人がすかんもナアなかつたチウモン上もんどんが好いて」〳〵〳〵白小便たれかぶつて女子食傷したトキヤ古ふるか」きやふ【脚巾→腰巻】をふば黒焼してヒックロウタばんソン時の静御」前チウもんニイよし経どんの形見チウテへ呉クれサシタヤアホ

〔十二丁〕ヲハイテ、いふもんばん　佐嘉者「ハ、、、、おかしうし」て腮どんが釣りよる此親父どマア」どこからノウアノ五器〳〵と尻つなぎしていでだこを括り付た」もナア皷といふもんばんミ「ヲリヨウおどんが邊の堤チウもん」ナア大きな堀りよふバほつて水おふバ一ぱい入て置ビヤア」惣してもんばんナアおらぬビヤアこの人ナア大すら事【大嘘】をいふ」ビヤア　佐嘉者「ハア〳〵〳〵〳〵腮どんも腹どんも引ッつッた、、、、、、」と大笑ひすれば此女腹を立テ　曹「ナニわしがすねの筋」が引つッつってうまれも付ぬちんばに成たテ、云て口から出ふう」だいに【放題】に人中デ恥かゝせて、ソギアン笑ウもんぢやなかビヤア〔以下ウ〕と無暗に腹立れバサカ者「コリヤア亦たまらぬ間違々々」大間違ヒハア〳〵〳〵〳〵といふて行過る

片あしハ二上りかたあしは三さがり

これも身筋に糸やひくらん

ハヤシ「ヨヲ、イテトン〳〵サッサアトチンツルヲッ、ンサッサア」太皷音トン〳〵皷ノ音チャッポン〳〵人声ワヤ〳〵〳〵〳〵」サカ者「ヤア賑やかな事ノウ此の本ンの字と道といふ字をち」よふちんの印にしたハヤアヨメタ本庄町かヤア是ハ皆ナ一様」に髪ハ下ケ髪で白無垢ニ緋ノ袴と出懸た所はさつぱりと」して誠に行儀がよく物腰官女テ、云ウ模様してひよふ

〔十三丁〕しもよく器量まで揃ふたヨウ垢ぬけのシタ仕様ジャどふ」でも是が此内でハ壱番であらふノウわさん【お前】達チ觀僧「是ハ」成程ヨイ趣向ジャいかさま此模様ハ龍宮城の乙姫が夜這星ニ」恋病ミした時龍王が気散ジの為に千人の官女に申付て」音楽をさせた時の様ナ上白もんばかりでアノ琴を引て居」る白物ハ中々うつくしひ奴ノウ愚僧杯も一夜野辺ニつれて」いて引導したらバ飯より酒よりよかろふと存するなんと」小僧どもハそふおもはんか田舎者「アリヤ奇妙頂来興ケレッナ」事をするもんどんいかに諸色が高かテ、りつぱなアノ高ミイ〔以下ウ〕はニアがつてアノ様ナふとか大十露盤で算用しおるばん又」片一方ニヤア摺木をうッすごき〳〵しおる娘共ア一番遣て」くいたろふョカろふ　赤猿

十露盤にかゝらぬ茶屋の賑ひは

仲間「ヲ、成程わさんの言ふごと【如く】考へて見た處が先ヅかふ」じやろふ今度のはやしで町中が大物入したじやロウ」ソヒデあがりに金出すの出さぬのといふてけんくハせん先イ」早ふ算用をさするじやロウ在郷「ソリヤアおまいさんの

〔十四丁〕いふごと間違ハあるマイあいどん片一方のほうにアノ摺木おふば」ウッすごき〳〵音のする物アどふいふ事かしらん仲間「アレハ」大形金をすくなふ出すテいふ者ハアノ味噌摺木でたゝい」てくるゝつもりジャろふか町方老人「ハ、、、、風毛たもんどん【馬鹿者共】が尤」是も久しく何事もなかケヘニ知ぬハ道理なれども大そろばん」の摺木のテゝよふマア心の付タもんノウ在郷「ソントキヤアおどんが見」当がチットちがふたカノウ其時キア何事する所じやロヨカ」町方「しらんこんナラヲおそへて【教へて】遣ろふアノ大そろばんテ、おまい」さんの言たタア琴といふていくらも糸がかゝつて哥うたふて〔以下ウ〕つかむものばん又摺木といふタたア三味線といふて皆ナ哥」うたふて曳くものばん在郷「成程〳〵〳〵奇妙ナもんぞソヲイヘバ」ピコチヤン〳〵〳〵テゝ音のしおる奇妙ナもんぞ宿に帰てから嘸」共もへ咄して聞シヤ【せよう】名を忘んヨウに皆ナ覚へておれ〳〵〳〵レ「ムウ」大事味しやせん〳〵〳〵覚へた〳〵町「ハ、、、、、、田舎「サア〳〵」あつちの方にもまた大事味しやせんが初ッた町「成程どこも」かんも大事味しやせんが初タ見事聞事見物事侍「成」程この八丁と申た所のはやし方どふもいはれぬ星も行儀作」法があつてよく揃ふた囃子方も随分おもしろく遣ッた

〔十五丁〕本庄町ニ次でハこれ式番ジヤロヲしかし呉服町の三女が囃子ハ」迚もどこへ出しても壱番ジヤロウ此一ッハはなれもの今からは」やしする人の手本師匠ジヤロウ連女「かふ見流してミれ」バ誠に奇麗ナ事ノウ功者「ある時が茶屋の囃子も手」に手を盡したと見へてはやしの手ハ少しづゝ違ふた斗」甲乙がめつたにハなかばん伊勢屋町魚町唐人町など」の囃し方なともヨウ出来た然しかふ見た所が本庄町」八丁ばゝ呉服町六座町杯の行儀ハ定の人数斗舞臺に出て外ニ」人影が御座らぬそこで吃度見はれがありて尋常に〔以下ウ〕行儀がよしの助餘の町々ハはやし役者が出ると其儘」前後左右に我孫我娘のかほ見てくれろがしに干蕪」の様ナ皺ごらのばゝさんの鼻たれた子のテ、折角床几に」懸ッて居るものゝ座をふさぐゆへ手フカラ下タから見て行」儀があしく見はれがなく気障り耳障りに成るもの」で御座る又今度の事第一見事といふは三階舞臺」の懸り形装がどつから来ても見事で申分の無キ町」々の構へ殊に人には模様を見せて目耳をよろこばす」顔の構へて御座るに役者ハいづれとも無用の者の其内

〔十六丁〕に居るハ下に油断すると格位の人も交じッて見物ある」に無禮と申事ハ承知で御座らふ是でどふも其手わさが」きたなくなります故一二の番付ハ出来ませぬ抑下から」見上ゲて見る物ハ飾り物細工物高札サヘ下で見てよ」ければいつでも上ニ揚た処が一向見はれハなきもので御」座る下タで見て釣り合あしき上ニ揚て能見ゆるもの」て御座る故飾り物など拵ゆる時ハ高く置物ハ高き所」に置て其釣り合を取ハ手柄が出来ますもので御座る」惣して遠くはなれて見るものに細手の働いた事をし〔以下ウ〕て

ハ是又大よごしで御座るッラ本庄町の様ナ此節の出立ハ」紅白只二色にして細手の働いたちらし模様あるきもの」ハござらで皆ナ一様にある故見揚ダ処が見事で其上呉」服町八丁ばゞ本庄町などハ役者の外は舞臺に人影」が御座らぬゆへ自と舞臺の位がよく夫で人が見て誉」ました遠くから見る物に我娘の持た衣裳此時社見」せんとおもふて衣せた処か一人〳〵色目違ひ又綴のち」りめんのちらし模様付た結構ナ物でも遠目でハ地合」ちらしハ分らぬもので御座るばん一向見はれがあしく本

〔十七丁〕庄町のゴロフク揃ひに及ばぬハこゝで御座る何もいらぬ上ニ揚」るものハとふばた【凧、幟】でも小手の働ひたハ遠目ニ成とぐじや〳〵」して見はれが一向に御座らぬ小路「成程 御まへの評判丈」至極然し唐人町八戸寺町などの異國人ハいかゞで」御座る 功者「成程是もよき趣向で景色よろしく」見へます第一 今の世には恰好ものでひゐきも多ッ御座」らふがアッタラ事是を 子 供にさせたなら第一ともイ、さふ」なもので御座ッタ子供ばかりする中に大人ハおとなげな」く見へます異國ナラ中々に 囉吧 とチャルメラ杯入たら宜し〔以下ウ〕ふ御座らふもの

佐嘉そだち意地と張りとが強けれバ

異國なもの【一國者にかける】と人ハいふなり

実に春は鄙も都も浮かれ気の野心誘ふ桜木ニ」こよと 手まねく青柳の唯さへあるに此結構なる御祭と」申せば人が人なす群集に已が住家の言葉くせ田舎な」まりの白兎なるも却て滑稽洒落の種本とな」れバみやびなる人の身にハ結局で鄙珍らしき風情な」るべし在郷「瓦多右衛門どんヨリ此ケヘ 狂言芝居テ、

〔十八丁〕謂おるばんチョット見ていこふか瓦「ヨカロウ 鰍助「ヤア〳〵〳〵」コリアにやァ事キャァだいもかんも見んかどふいふ事か気」違ひの様ナもんソウ瓦「ヲ、ソヲジヤこりやァ狂言チウもんばん」じィッとして見ろ〳〵 鰍吉「爺さん頭らァヲッぽれし」てびんもからず長州出立の時のごとしておかァしナァぽ」いしんきて手 扇 子ひろげて？コ〳〵させ足をぢだんダ」ふんで何ナァ事ジャりふろふ言おるばん又アノ頭らア」ゆいかぶつたァ女子が鉢マケしながら啼おるばんコリヤア」夫婦喧嘩してかうづか取ッたもんばん瓦「コリヤァ千本〔以下ウ〕桜といふ狂言デよし 経熊谷首実検 といふ所ばんコヲト」ヲ、ソレ千本桜の三段目こゝが面白キ見所じや物言ナアノ」ポイシンハぢん羽おりチウもんアノ女子ハ熊谷がしようばん」瓦「アノ熊谷チヘロウがつらァぜんもん【禪門→乞食】がして来る 鐘馗大臣の」ごとして又こなたの方におる女子ハつらと手の先ばかり白」ろふして袖の内と首のにキァまつ黒ふした処ハなしじ」やろふか又女子ニャァ手の骨のふとサァあつもりの鳴どん」ナァ百姓ばし【でも】さすじやろふか鰍「ソヲ〳〵あれハ慥に色が」黒かケヘニ手の先とつらばかりうどん粉どん付たもんダァ

〔十九丁〕瓦「ァ、そふ物言ナ佐嘉ン町のもんどんから笑はるゝテヘ」といふ内によし経首じつけん済して跡は熊谷が女」房あつもりの身代りに立た我子小次郎が首を見て歎く」所に移ル一 鰍「ヤアアノ女子共ンガ苧桶ジャりいろふ古るか飯つぎジャ」りいろふから白ふかもんバ出て泣ばんアリヤにやあ事」ジャろふか 鰍「ハアありやァ大キナ握りめしばん鰍「アン其」にぎりめしを見てなしなくジャ

ろふかァ鎌「知れた事」あの握りめしがあんまり大かテへどつからかぶり付ふ様モ」なしやァくハれんテ、言てなく所ジャろふノウとッツテン瓦〔以下ウ〕多「又いくらいふてもウ、物ばかり言てアリヤかふゆふ事熊谷が」敦盛様ンの身代に我子の小次郎を立タ夫で小次郎が首」をじよふらが見てなげく所ばんァノ握り飯のごとあるとは」小次郎が首ばんといふ内に大勢人々「ソリヤ袴崎から獅子」が来たといふて大勢どやおしとか初り大勢「ソリヤ〳〵〳〵」又どやおしといふ内に獅子ハ献上奉納の米俵田手から」酒車やら白石秀津よりも狂言米俵其外所々より我」も〳〵と御吉例に任せて献上おびたゞしく賑ふ御代」社目出度けれ

〔二十丁〕懸る群集にそこにハ水がらくり此には蒸気がらくり白子」が踊りやら山あらしといふ犬の見せ物やら古手ヵぬげ首」やらから国鳥の見せ物其外数限りもなく物うる声」はやし太鼓つゞミの音賑やかなる景色也

世渡りハとんつはねつの獅子踊

綱一筋に懸るからくり

若諌早「ア、息もからだもッン切るゝ処ジャッタといふてよふ〳〵」おさるゝ中を出て来る四五人鉢まきしたもあり肩ぬいだ」もあり汗をひく〳〵「ヲ、イわい達ァつれンばぶりあやァさん〔以下ウ〕ョウニせろうファノ檀兵衛ハ足ンバアへらいうちむしッたァといふが」エットきつふなかつたかァ此の弥多右衛門ナア彌「ヲ、ヘ、、爰ケ、」居るばん此のお福ゴガアワイ達アチ手ンバふッぱつてはつて」いたてくいなれんかんモウどやおしんでエヘット息ンバウッ切ロウ」でしたア先アッ煙草ンバつん呑ふばんと茶屋ニ立より」ダン「ハァ一寸と御免ンないト腰打懸て一式ながら此ケへ上りな」れんかんこの煮ゞへいくらで御座アルかんれん」根にとふふしかぐちが入ッとる 辛「ハイノウ三拾匁」ダン「ヲットロシカ高アかばん六百に負ナレ 辛「ヨシソントキヤア拾弐匁」やいんさい【遣りなさい】ダン「シカタガナイ酒ンバ三匁がとゝ其餅ンバ一式ながら

〔廿一丁〕遣りナサイサア一式ながらよつて喰いないゴン「コリヤ大変」毒害ンバした彌「ドウシタゴン「ドウシタテ、此煮ゞ物ンばくふ」タラ大根にィ虫が穴をくッて蜘蛛ンが入て居る大毒ンバ喰ふ」タモウ目どんがひッくり返ッてタマアラン彌「ダアと煮ゞ物かき」まぜて見てへ、、、こりやれんこんチウテ穴がほげて【明いて】蜘の」エの様ナ糸ンが引ぱるばん主しやァ多良獄からジャルケヘニ【お出でになる】」れんこんナァ喰ふた事ダァ初てじやろふと皆ゞ爰の拂を」なしサァ此勢ンでどやおしんの中ンもいくばんと出テ行ク 辛「ハ、、、、大笑ヵ事最早此御祭も一七日といふにけふ〔以下ウ〕限り満ずる日なれバ弥ケ上の参詣群集して一寸の透」地もなかりけり

納め奉る貢の絶ぬ世なりとは

うごかぬ鉄の鳥井にもしれ

「サアきふ切ッばん足腰の骨の続く丈ハ見て廻ら」ふばん遠レ「知れたこと斯ふゆふこたァめッたにやァなかぼう」あいばつてん【あればとても〜だからと言つて】些ダァ上白もんの居る所ニも居たて【行つて】見るばん」諌早「コケへ一式ながら来テ、「アノ現形〔原文頭註 諌早？ 現にみる事を現形といふ也〕を見た処ラアたまらんばん」ダン「ヲットロシイふてぐわつテへナ【太いごつつ

い→ひどい】茶屋ッのふゴン「本ンほふに高

〔廿二丁〕かばんダン「アリヤアどふしたもんか家の上ヘニ又家を重テ作タ」もんばん 編「エヘリヤア三階チウもんばんダン「ワアイあいが三階」ジャルもんかん二ダアッあるモン二階ジャロウ 彌「コヲワイハ風毛ダア」事ばかりいふ人ノウあいが二階チウこんならふ主しが内ッのとハ」一階ぢやろふばんソレ現形に数ふて見なへといふて指さし」て上より一階二階三階と下に数へて見すれバ皆々成程と承知」するゴン「夫レハさふぢやろふがアノ又あんどんのヲぶらさがつて」居るしころ【だけ】サアいくらどんあらふかノウ 小者「なにがぶらさが」つて居るといふ事かのふ此内でぶらさがつて居るもナア〔以下ウ〕金玉とちやうちんジャロウゴン「ヲヽさふ〳〵挑灯とあんどんとふミ」ちがへた其挑灯〳〵〳〵小者「山王様ッの御猿じやゴン「ウヽ挑ちん」ノヲバ山王様ッの御猿ジャト言かノウ處替れバ品替るテヽ」佐嘉の人ダア味ナものをイヽふさるノウ其山王様ッの御猿」じやを数へて見たらいくらどん御座らふか小者「山王様ッ」の松ノ木から猿が三万三千三百三十三疋さがつた丁度其しこ」ろあるテヽばんゴン「ハヽアヲットロシイふてぐわつテヘしころノウ」佐嘉辺の人達ッの物いヽなるとハ御城下だケヘ物言が上品」にあるテ、諫早辺で聞て居イましたれどわしッ共マア

〔廿三丁〕そんぎやんナアロッがまはらぬばん　赤猿

何事も見ざる聞かざる無理なこと
物いはざるで済ぬ世の中

ダン「時にマア人達ッのよんにふ【大層】サアアノ町々の棚の上ッば見ろふ」どの棚の上ッもごぜどん【御前殿→女乞食】がァ三味引ていくらでも居るばん又こ」んたの方にャア万歳のャアらい目出イタノテ、いくらでん居」るばん又あつちの方ニャア女子ッだちら長州行のたッ付どん」ッッふんで又こんたの方ニャア上もんどんガアころもにちらしん」どんがちいたとヲバきて居るばん小路女「ハヽヽヽおたァ【お前は】なんちう〔以下ウ〕かんアリヤアノウ佐嘉ッ町の娘どんがはやしする処ばんアノたッ」付の様ナもんきとるとハ官女といふて禁裏さんの所にいる」女中のまねばんアノきものハ緋の袴ちうもんばん又アノころ」ものごとあるダア佐嘉ッ町の金持の娘の振袖チウもんばん惣」して此なたの方に万歳の様に皷太皷打ッもんどマア白山」町の者共が公家ノまねしてはやしする処ばん おッ達の新小屋」のちよふりんぼふのテ、いふギィ【から】キャア こなさりふばんダン「ハヽアヽ」権ヨ弥太シウヤン達〳〵〳〵一式ながらコヲワイノいはす事ダア」聞ダこふといふて此お上ミさんを指ざしながらアノ上もん【原文頭註　上もんむすめの事なり】ど

〔廿四丁〕んがきをる物ナア火の釜テ、いはすばん夫でわい達ィ見ろう」アノよふに真赤キャア焼ダ火の釜のなきャア足ッバフン ぬかるヽ」もんカア風毛ダア事ッバ言ふ人ノウ侍「サヲ〳〵貴様がいふ事」然し是ハ定て石川五右衛門が幽霊の出た処でがなアラヲヘヽヽヽ」ゴン「アノ又北の方の籔する和郎ハ長崎から唐人のおらんだ」のテ、雇ふて来たもんばん侍「ナアニ籔する和郎とハおかし」な事イウノウハヽヽヽヽ読た〳〵貴様籔するとハ囃するといふ」事でアラウダン「知レた事ッバ諫早邊デア林ッバ籔テ、いふもん」町若「ハヽヽヽ成程〳〵林も籔も同じ事どこか此趣向ハ籔ナ〔以下ウ〕所がアリサヲナ夫ハ扨

置御祭礼もけふを限りの御日限とあれバ」往かふ群集おびたゞしく茶屋もはやしも見世物も追」出し突出し歌舞妓サ入かへ〳〵息もつかせぬ有様也

まち〳〵に百囀りも出てけふを

曠しきの花色のそら

懸る処にソリヤ社佐嘉名物の喧嘩が初ッたといふや否や」長といふ字の付てある茶屋の上と下との大騒ぎとなり」下タより大勢込ミ入らんとするを三階より爰を先途と」詰かへ引かへ三味取て投ルやら皷ミ取て打やら太皷取てた

〔廿五丁〕たくやら挑灯取て放るやら最早大事となり揚句」にハ手の懸り足の懸り二階三階の板まではづして投ルやら」落花狼籍下に居るもの少しッヽ疵を受るもの多く」死だふりする狸もありしかば、東方「ソラ例の喧嘩〳〵」〳〵相手ハどこジャろふきやア生酔若「ヤア挑灯に陣幕」長ノ字ハまがふ方なき長州長瀬町相手ハ誰ソヤア謂に」や及ぶ名乗て聞ヵせんヨクキケへと大イ音声（ツツンツン〳〵〳〵」遠きものハ音にも聞ッ近キものハ目にイもみよヲ酒殿の飲」打で〔原文頭註一部切取不明船頭？　か？　木曾殿？　御内にて？　天王の？　といふ？　ふや」ツヽンツヽン〳〵喧嘩ナラ日の本一とぢばん＝印て世に〔以下ウ〕しられたる剛者ツヽン〳〵〳〵〳〵大根朝漬かぶな漬ケ朝から」晩マデ粥ばかり紺屋町とハ我事なり成らバ手柄にたゝひ」て見ヨ「ツヽンツヽン〳〵〳〵テン〳〵〳〵といふて昼の狂言の近」江原氏樋口次郎がせいふ【せりふ】をいふて走り行く此騒ぎに」大勢の見物人四方へぱつと散乱し落て行ク有様ハ蜜」蜂の子分れせし如くにて老母を手引キ子をいだきし」どろもどろに騒ギけり追〳〵役人懸付漸くなりもしづ」まり西目「サア〳〵〳〵喧嘩々々にし達ァよだん【油断】するナア」怪我するばん嘩レ「ヲヽ、親方さんナアきやッタばん此どじや

〔廿六丁〕くしやデ【どさくさで】おどマア【俺共は】腰さげッバカッカヤアテ仕廻ふた女「ソリヤ化ダ」こたァしたノフ謙ゴン「ヤヽヽヽコリヤア面白へはやしッの初ッタ」弥多エン方擅兵衛方早ふコケへ来て見ろヲ彌「ワアイはやし」ジャものかア喧嘩タアゴン「エヘソラ〳〵籔ジヤ〳〵是りやァ面」白へ籔が初タアラ役人どんの棒ッバ以てくらはせんサルバン」ナ「ハア〳〵是りやァ籔から棒ジャ

「権助擅兵衛ハ面白がつて見る内に二階も下も摑ミ合フ」様子に二階よりまつさかさまに落るもあり又挑灯やら何」やら投落スにダン「ヤアヨットロシイむしり合ばん〳〵二階〔以下ウ〕のチョンケンカラ〔原文頭註　チョンケンとハ頭上といふ事佐嘉でハトンミョウといふ」ばちまだら〔頭註　ばちまだらとハマツサカサマといふ事〕打ッておッこちおるッぞ〔頭註　ヲツコチルハ落るといふ事〕彌「この馬鹿」ァ云ナ二階から三階へ落らるゝもんか天の地に成てハおらん」ばんダッ「ワアイ二階から三階ばんといふて頭テ上から段々」一階二階二階と数へて云ウ彌「イヤ三階からバチマダラ打ツ」て落タ処ンバンダン「イヤ二階から三階へヨツコチタばん彌」「コノ風毛もん二階から三階へ落るゝもんカアイ擅「デモ落」らるゝケヘニ現ゲンミョウ形今むしり合て落て見せたばん彌「此」人ッハ二階三階どんバはきちがへておるけんニャァソラ見ろ」ヲヤアト云て下から一階二階と上の方へ数へて見すると

〔廿七丁〕ダン「くそくらへだまさるゝもんカアコノチョロマアナアンチウキャア」一反男ッのおれに言ふタ事ッバ今又ロッバ変替へするカアなら」んばん此時最早昼過七ツ比の事なれば諸人御祭酒の」生酢となれバ皆気があらく成て居る故早や摑ミかゝら」んとする所へ此時二階の上下もいまだどしやくしやなれバ」三階より投おろす挑灯擅兵衛が薬鑵天當の上に」當り按ばいよくつらに引ッかぶると目が見へずアイタ、、、、」コリヤドヲスル大切ナア薬鑵ニイ山王様ッの猿ッ三万三千三百三」十かさいたアイタ、といながら弥多が打ッと心得て其儘〔以下ウ〕そくと【むづと】摑ミ懸るに此時役人らしき人喧嘩と見て引分ッ」と来懸るトタンノ拍子に行當り役人に摑ミ懸れバ役人」大ニ腹ヲ立「此狼籍者ソレヒッつかまへろといへバ下役らし」き警固此権助が為もんを取てねぢすゆる此時弥多」も大ニうろたへワナ〳〵振ふて逃んとすれども腰がなへ」て立れず同じく捕られ役「其方共マアどこの者ぞ此」群集中で狼籍致す條不届キ千万いかさま兼て」柄が横着不行跡者共ジャロウ有躰ニ申せとありけれバ」彌「ヤア私ハ諫早邊のもんで御座アルわるかこたア爪の垢」〔廿八丁〕ッ程ッも生れてからした事ダアア御座アらぬばん御めんサアイ」役「ム、其方悪い事せんと申がそん時キアナシわな〳〵振るい」ハするかア彌「ハア私ハ昨日からおこいチウもん振ふておるけん」今もふリイおるケへニ御助ッサアイテくいなれんかん役「ウ、其」方正直者なロッなし喧嘩アしたかア有躰に申せとあり」けれバ彌「ハアおまいはんも知ての通り先から天地ひつくりガ」ヤッテの喧嘩の時ケへアノ権助がいふ事聞てくんない二階か」ら三階ア邊ッニイばちまだら打ッておつコチタテ、ぬかすケへ」私キガワアテ二階から三階へおッこちるもんかァとッぴよふしも〔以下ウ〕なかァ事ッバ言まして摑ミ付て役人様ッに摑ミ懸アてッ罰ッ」が当りましたアバン役「ナニ其方ハ権助と申者か惣じて人に」無体ナ二階から三階に落ダアと申てさかねぢいふてゆす」る心底ジャろふ有体に申せ何角申紛ると拷問に懸るぞ」とありけれバ権助面の色土のことくなつてふるひ〳〵ゴッ「 」ハア私ッもヒョット弥多ェンどんのうおこりが移て歯どん迄」かふふるふケへニ御助ッサアイて御くれなれんカアッ惣じて」弥多ェンどんの初手から上ッどんガア一階アテ、ふて聞セて」ソイカラ天地ヒックリ返ッてへ〔原文頭註 諫早ニテハ天地もひつくりかへるといふ事をテンチウと云〕喧嘩どんがア初ッた時キアア又相

〔廿九丁〕談仕かへて上ッどんバア三階テ、変がへして今さかねヂ云てへ」ゆする心底ジャロウ有躰に申せ何角申紛ルと拷問に懸るぞ」弥多ェンどん惣じて御役人様ッのまへで此事わくるばん」二階から三階へバチャダラア打がほんな事ジャりいろふ三階か」ら二階にヨッコチダガほんな事ジャりいろふ役人ッさん訳合付」ておくんなれんかんそれッきかいで仕まおふばん役「ム、」尤千万ぞいならば権助が申條本ッナ事ジャロウ彌「ヤ、、、、」そりやなんちうマア事じやろふか二階から三階に落らるゝ」もんのふ役「ナニ成程ふしん尤なれども其方共ハ先刻より〔以下ウ〕天地返ヤッテの喧嘩と申たァあらふさらば天地返ッたならバ」二階から三階に落る筈ッ「此時大息ついて居丈高に」成てソリヤ私キ理方デ勝ダばんといへば此時見物諸人一同ニ」笑ひ出し扨も気転のきいた役人様ッぞ此言ふ時に」吉野の久米の仙人も出さしッタならぜんなく通力」を失ふて落ん

テ、ア女の方から落るであらふッヤッタ」もん

武士ははがね町しんちうのわるひ故　　赤猿

田舎なまりがとけぬドロ銀

〔三十丁〕

一階に聞かれぬ事を二階論

是ぞ四海の人の口の端

役「権助其方には外ニ糾スべき事あり 先刻ハ役人に」向てなし無礼を仕たるぞョッ「ヤア〳〵〳〵夫ハ御めんな」ァイ先から喧嘩が初ッタ時ケヘ二階から三階へ山王様ッのョ」猿ッバ三万三千三百三十放タとおもひなされ其」山王様ッのョ猿ッがわたしがつらッへふつかぶッたア」ケヘニ途まちがふて役人様ッニイ摑ミ付タ御免ん」ナレヘ役「ナニ山王様ッの猿といふことは一向わから〔以下ウ〕ぬわれ以の外の奴ッとしかられけれバョッ「スカサズ地に落た」る先刻の挑灯取てコイノウ山王様ッノ猿ッがサッタ三万三千」三百三十ジャロウヲツトロシイ名が長ウ付ちイタもんのうと」いへば役「ウ、其方ハいかさま其名も人から習ふタジヤろふ」ョッ「ハア此役人様ッナアユウ【良く】知て居ナさるがあいば【あれを】おま」いさんも私キよりやア早よふアノ人から習ふて居るもんば」ん早か人ッぞといへば役人も見物人も皆々一度にふき出」しバハハハハハハ大わらひ役「此ヤッ馬鹿ナ正直者ゆへ人」か山猿とおもひなぶッて挑灯を山王様ノ猿と申物とだま

〔卅一丁〕したものじやろふ早く追拂とありければ此どよめきより早や喧嘩もお銚子が過たよりの事なれバ酔がさむ」れバ御祭りがらと申自ら痛ミ入り互に隔意なく和」睦して夫より物笑ひとなり万歳盡ぬ目出度御祭」なれバとて又もや囃シ狂言見せ物始まりて幾千代」盡ぬ御祝と囃し〳〵中の下巻物笑ひの種と筆を」納るものは

案間坊　　暮成

猶下ノ巻近日中発閲仕り筈出し申候御〔以下ウ〕ひゐきノ御方宜敷御評判〳〵〳〵

補正

第二十八輯

九四頁一四行　【　】内の訳は【貸して上げなければ】と改める

尚本資料は入来言葉の模写でなく、鹿児島市のものに入来のを混ぜたものである。

右は上村孝二氏教示

第四十八輯

五三頁中五行　佐1トル

五四〃中十〃　佐19

右は小野志真男氏教示

八一〃一〃　長壹岐0

熊肥後68